開卷驚奇俠客傳　第壹集　全

万屋

黒川金治郎

本所中ノ郷竹町

開巻驚奇侠客傳第壹集巻之五 分金

東都　曲亭主人編次

第九回　御士二人び癩病人に遇ふ　光棍初く舊悪を懺悔す

再説著演の那銅笄を索難て從者と共侶に花水橋を彼此と且く徘徊する程に高麗寺村の方よりして五六個の里人の一個の壯佼を縛て這方へ投て牽のそ来るに近づく隨のよくて見れば這壯佼の別人なるべきのふるの橋の上に仆れてあるを抱き起すに金一両を取せる癩病病人なりければ亦復疑訝りて肚裏に思ふやう原来彼壯佼も舊悪ありて囚れ狼狽ぶの竊疾ありて綽のあるに及べるまん同じく癩病人の中に相識なるも一人ありて原是藤澤に程遠からぬ里人其ひが獨子なる小五郎と略ぼ同年の生れ他の両親の長く病着に生活の便りを失ひ朝の夕に絶んとす所を演他に

本所 貸本 中之郷竹町 黒川金次郎

米を取せ錢をとらせて両三回艱苦を極めさせしとありさて両親世を去りてのちなほその里に住
やうびん筆把る吏の人を恥れば或人に推せられて紅粉阪なる柳巷に赴きし地方の書役
となりぬかくて年來を經たる登時小正二ハ著演をえて遠く走近づき贅を祈めて
ある檀那久しくもあり絶かけてくるまで健にかくしてを嫩いたる什麼今朝は何
処へとてかく早く出させぬといはれて著演いはれかとく昨ハ梅澤なる遁家許に赴きて小夜
深されば留られて今朝未明より還る折からにぎゃうなりて且く徘徊をする和主の名ハ俺が
里長の噂に聞くをるが是悉もなくていと愛て就て詢ぬ一議ありその壯佼ハ何等の故に細
められて牽るゝやらん聊も事よりもあれば情由を具に告まゐらし這里もて長足を駐るハ心つきなる所
為に依れどその崖略を示しねかしといはれて小正二後方をきつと向せるに彼囚徒ハ目四郎と喚
做す宿所不定の破落戸ハ兄より俺花柳なる姿鏡屋の紅筆といふ遊女に馴染て
幾夜さともなかりの程に賒になりたる遊女の價の十四五金に及ぶ債ありて賃なき應宿

所の徒々の里長といふ人の搗鬼出ぞよりて噂も聞えたれ主人の握て紅毫に絶て逢せず有りき
ぞ昨夜那奴が推て来り遊女の古借を取せんに快紅毫を出せといひ三ひ侮るが且て金を
逓与べしと催促せられて絶に圓金一両を取出て妓有に投與へ左右なく叟を推戻しぬ
賒になせられし金ハ十四五両であるをそのうち一ツも足らずげるをいかでせん残りを遞与
しぬねといふぞも果ぬ声ありて古借ハ那奴のからに取せん且その金を受收めて快紅毫に逢
せよといひしを妓有のいかで聴くべき否ハ云云と論せしかバ目四郎大く罵狂ひて矢庭に妓有を
撻倒し障子隔亮しを蹴破りて鄰坐席の杯盤さへに踏摧き擲ちくろ狼藉いふべうも
あらざれバ人許ヨヌして前後より組禁めて縄を被て一夜さ戌りそ曉しより然が昨夜ハ在下も
あれらの中に拘づらひて目撃のせし文書を写めて却鎌倉の問注所へ牽ゆてまかりて候なり
許まうらんと那姿鏡屋の人々とうちつれ立て黎明より出て這里まで来つるにと辞せすと
某ハそれ著演ハ聞あへず原来彼目四郎といふ喚なる壯佼が色にその身を持崩しつ。

人互くまうーとう。俺が取せてる金とそのと熟奴ゐあうんとそその禍を釀せーナそ自業自得
とのひなぐら世ゐ恁る白物のるそゐーもあらばれば亦怪むゐ足ーばるる紛盜賊密夫ゐなぐるぐ
憐むべきのるうねども遊女ゐ惑ゑ債を出るぐ漫ゐ辯を惹ゆ七細られて訟の場に牽ゑハ
不便ゑ俺が那金を取せべ柳巷ゐ赴くよるがもまくて縲絏の恥いあまぐ深小人罪ゑー
玉ゑ抱ゑ罪ありとゐ古語も似る他がその夜の狼藉を見べきのゐつぐ好意の還く
仇ゐるくるゑ知ぐゐ悔ーゑゐもあくせ一旦極ひそゐ人あるべ這異遭ぐら今ゐ縲
絏をゑく釋ぎゐ仁と不仁と地を易て本意ゐ違ん薄情さと又ゐそのるのるくぐきのゐ
送せーとぐ銅笄を迹ゆ他い拾ぐゐ這義も向ゆ仁るゐ今一番極ゐ水如とあく尋
思を考ろーゆ小正二が云云と告るを送るく空果々眉根を顰め嘆息ゑゐ忽に閃
ゑぐき大胆不敵の白物ゑ恁いべ俺さゑ面正くゐ発と考ら他いつぐ妻ゐ使れる針
妾の獨子ゐゐゑ父い既ゐ世を去てよるべゐくぐとゐるーゑ一稔宿所ゐ召とゑ且く使ひ試

たるーゐ素ゐよゐ犯状宜くゐねば折々の教訓とその身の為と思ふとゐく主を疎を親ゐ知
らゐぐ遂ゐ逐電ゐるーゑ他が母い苦ゐ病ゐ殆ゐ程ゐ苦ゐ身ゐるゐ介後他い近郷ゐ
存りと噂ゐ聞ゐるのを相見ゐるゑ六七年ゐゐゑ環るゐのをゐ倣せーゑとゐゐ細ら
ゑ訟の場ゐ牽ゐ縁由を問ゐ有數ゐゐ不使ゑ他いともあれその親の末期ゐゐつゑーも
あれば極ゑ人ゐるきゐく欲ゑ枉て俺們ゐたゑゐ債の金いゐるゐ後日ゐ俺們貴ゐべー
ゐの義を只管憑むのを兼引れゐべ幸ゐゐんとゐひ誘ゐ慈善の辞を搗鬼とゐ思ゐ
ゐ小正二い頻ゐゐ感ゑ先ゐ齊一停立ゐ家人をゐ人ゐ各位ゐの大人の寛せー
ゐを守れーゐゐん這方ゐゐい藤澤ゐ福良長者でゐるゐ俺們が為も忠人ゑゐの
年來の慈悲善根飢渇ゐ逼りー彼此人を極ひゐーいくぐゐ一萬ゐゐの
髑髏を哀めゐゐ葬ゑゐ功德を誰を知ゐゐ形ゐ介ゐ其の日四郎を恁
恁の因縁ゐるゐ債の金を引ゐゐ極ひゐんと宜ゐ這義を兼引ゐぐゐゐ

衆皆うち吃驚て且驚且歎び齊一進近つゝ一箇々々に名告をなして禮する方ぞ知らず。しばし大く無禮を仕りぬと。先ちを辭詫るぞ中に姿鏡屋の主人ハ又恭しく。著演にうち對ひて既にいはせ給ふがごとく。昨夜這人の理不盡なりしを捨おくも吾生活の妨になりぬれバ已ことを得ず鎌倉へ牽ゆかんとしつるに。寔大人の示論しも由縁あれバこそ示させ給ふ和談ハ只這人の幸のミにあらず亦俺們が歎びに許されバ纔に果るまで雜費にヨスく没ることあらじ。然ハ名高き大人にあらせ給ふなれバ後產疼まで心安なる妻よりの佳客ならねど宿れバとて月来の所為ミまもりねバ債の金ハ後々までもたるゝろゆる拭ぬひぞ且本人を遮与へまへらん郷縛の繩を解なんと。繩とる男をいそがせバ応と答てあちこちかう組るを緩る程にその餘の人々も皆倶に目四郎に被る繩をぞ僕とく解ほどけり。然程に目四郎ハさきの程著演が取せたる那金をもて紅宮に會んと思ふ胸臆の誠ならねバ支戒らぬ勢ひ遂に已ぬ憤に罵狂ひて細られ牽れてこゝまで来る程に又著演に撞見て。

然ども抑留られ昨夜のことを小正ニ告る折ハ悔しくも熱湯に舌を焦せる人に猶且醋を喫む心地して素より無頼の癖着るれども人と生れて本然の善心あらざるにもあらざれバ恥て頭も擡ざるを既にして著演ハ慈善の心始終違ハず今その悪言を咎めずとて返きの只ならず露路を還て彌よくの誘て又その縲絏を極ひしかバ呆るゝまでに慙愧て且感じ且歎ぶのミいふよしもなくつくねて登時著演ハ故意目四郎を睨へて這白物奴が年ハ長ても悪心を改めざれバ幾途も遭ふなりとおもへども汝が母のためゆるすなりさりとて這回ハ極ぬるさなる胆竟を納易て人になれ後悔に可惜頭を喪れんなどせじと叱られて傍にその意を悟りし目四郎ハ稍頭を擡て家公ゆるさせ給ひ重々しく洪恩を忘まじく身を責て佗と慎をいれん悔入ていとかひなくも著演ハ又衆人にうち對ひて和談の一條ハ甲斐あらて今も異に治りたる歎びにハ優るまじ前にも既に約するごとく那奴が債の金ハ所にうち權たる盃盤も償を揃て贖ん翌倦宿所へ訪れよりその折金子を遮与ん

ふを感ずる姿鏡屋の主人いとれを呼のべ宏のそこの義に及べば色を弱弗ど情を賣りて生
計ふ為る妓院ゆゑ遊びのなりてもあり況せ上に隠れなき大人の高義に義ぶ〜と云ふ
損益を論ずれば贖の外に思意なるべれども皆共侶に宿所を送りもうんと思ふ兵
媚賣柄に憚りあれば這里を別れ盃を允しめれと受て答の美く繕ふ女子も
るよ所の節たでよれ和談の口詛を小正二も及その餘のめも共侶に嘆賞て姿鏡屋の
家公宣に介て快罷りんとそがて会共に〜著演に告別ん従者を辞すく労を
却目四郎をぶ伴ふて還る花水橋の華をまこせ遊里を立てたのそだけ所
著演れを自送を既に遠くまり〜れ又目四郎ふち對ひてふ思ひも似ずける汝に島
許の白物をの外の飢渇に堪難て身を投んと思ひたとい〜虚言に奸智に長るでくな
るも十四五金の債あり妓楼に登りて一両の金を慾て遂んとすん最愚を所為ぶ
是より支を惹出て竟に縹緲に及び〜いとの俺を欺くる報ひと思ひ恨とあ〜とそと

俺に憐て重て汝を拯ひ事情を知らる狡あるべ具に説示さん俺料らにも
這里に為て汝昨夜の為体を吟ふ及びて悔ひに一両の金に惜む足ら糸ど他に縹
緲ふ衍て件の金を慾に取せ〜ゆるぶ那金を取せば他ふと債ある青楼に
登りを汝他に妓院を開て細られて牽ふ衍ふ起ちをゆるぶ極ぎるべ
非を補に棟ふ〜と思ひ〜ふのれば只の這一條のみるべ詐めべのれば宿所へ来よ
とのそ〜立て藤澤に還るべく程に日四郎に今ふ初て夢の覚るべく洪恩徳義な
感服て何容ふとて従ふ却説野上蓑右演に躯て宿所に還著て且従者を休に
せ猛可に奴婢に吟呻て日四郎を玄関の次の編室に召陪さて早飯を啖るど
る程にそのの外に奥に退て頃之て又立て来る却目四郎に對ひて曰ふ御に汝に詐
ぬべのあるとの〜別義にあらべきの汝に倒れ折俺従者に介抱さて某を飲せん
とてけるに歯を噬締て受ざるけれが力に挿る銅箭をの〜聊口を開〜各繕を紛きく

花水橋悪木過春
目四郎
小正二
有像第十二

取送せ。欲しくば。死所へ出死果て刀をくるふ銅笄をうり死。抑件の銅笄は。俺親の送覆
也。家の紋を附られ。こゝ最惜とのゝ必ふよう。今朝は未明に立出て花水橋を徘徊し
たく。汝は遺ひも這所以。那折汝が迹を残りて。存りければ。俺が銅笄を拾ひ。上の
ゆくゑも然るに。あらぬ返せやといれて。目四郎些も驚ぎ。現宣いまるゝ。那銅笄は俺ふ
あり。そを拾ひふあるぞと詭計よりて。鍋を入。恁のそいぐ憎きても悪き飽るゝ。今は
何者匿むべき。在下の君の仇。きのふまぐ不測の罪に陷入と。謨りしかども。その人もとうそ
と言。ゆゑてを高名虚しゆゑ。大徳仁義の長者に恥て。稍悪念を轉じその大阨を告
なゞと。ゆゑのゆゑ。今はふせん術もなく難き義あり。あれの情由は一朝に説果べくもあらぎ
るふ這里にあれ端近く乾浄れる所。意中を盡しまうさん欲とふ。著演領ぬく。
介らば俺と共侶ふ這方へ来よと。先に立て庭を隔て離舎へ伴ひて坐をとられ。目四
郎障子を引閉て。衣領の間に隠しる。那銅笄を取出て。膝を我が声を低めく。

這銅笄を竊ふ。深意味あるとて。次々にまうさ。願ふは收めあへとの。
ぬく返を著演。徐に取七ふとて故のごとふ。柿で却目四郎に言。甚
麿と訊ふ。目四郎ぬぎ嗟嘆。七日俺うとり生まうさ。思ふ言長
くとも。在下原は假名川の客店肝八と喚れ。獨子でけ。故に世の人代
今は至て在下を客店の目四と喚。なる年十五六より比。這身の悪心稍萌し。
良友に引入れ賭博に耽。遊女に惑ひて親の東西を奪ふ。義番に限る。
れ勘當せられて一稔。賭銭友人に親品を頼て其処に寄りて。父の他行を窺ふ
母を賺て銭を借り。友にも借て皆賭博に失ひ。いとも悪く。言ふ父は嘆ぶ。
歎く。母は箴ふ。後は母も中堪て。樹てうやく。身者ぶれ日夜の悪所に増し。竊ふ
不如と。尋思て。二親の外に。中者稀ふ。折て張に。昔門に。程に客房に
逗留の旅人とおぼしき。夫婦と。二人を。男子いて。病臥て。何はやうなる。讃ゆを心

たちまち竊聞せしかの比底倉を毀されて、脇屋小將義隆の家臣を他人の子と偽り携へ來る。小六とかの公卿角の主の義隆が子なりとて、特に諸々と送言し、秋の包む短刀と卷軸とを、兩三種妻に示し、これを小六殿の俱し給ふ藤澤に起けり。郷の隱れもなき野上史著聞しかば、少しの時義を結びたる異姓の兄弟なりと左も右もと養れたる餘の多く低くとの声、細りて苦しみ泣くめり。措なる一封の筒を取出でて遽しく出でぬ。妻は頻りに流して口説くこと哀傷悲歎。竊笑く隨ふ氣の色、感入りて竊いも且つ絶えて忙然たり。折外面の人の足音とかの來るは俺親と看られんと思ふ。東西もなく逃げて親品の宿に來り、本意を示す那藤客とかの思惟ふ卷軸は脇屋の系圖又短刀の菊一文字と名付くる重宝、又一種は何なるかは秋は持れて天ぞ知らず。けれど卷軸と短刀は新田の餘類の證据と那落人の鎌倉訴禀さるも濡さぐ。

許多の賞錢を賜べ。去りあれども俺親の宿せし品今許しなば親も亦落人を留措たる出を受入然でば外聞妙なるも且藤澤へ遣しと尋思を去り且過ぎ。綜の便宜を覗へば那病人の館大六英直と喚れしの老錢程も乞く綜の趣を人英直の柩を遊行寺へと丁寧に葬さるべく為体の送もなく行方知れず妻の母屋とかの小六と俱に柩を成して大人と憑きて這郷へ來れば所の時ありそのはんと思ふ心を親品に告て竊に相譚ひに親品問ひて從ひ和主ひらく思ふ宝俺們い博徒でも人に俠者とかの俠者とかの宝を這身の栄ひ思べるに此で賞錢を求とて海道一の俠者なる野上の公者を其落人們と脅一罪なの害なべ世の豪俠の躰なべ。然とも和主ハ賞錢の慾ゆよ許んとかの禁めされば、けなる親計を除く乾人転児の好を離れ六郷以西貌姑峯なる東で飯ハ喰ひ後悔生涯と窘れたるの宝思ハ留りの這親品ハ甚町老猪二天と喚れる豪傑でかに惜むべ年來強飲

脾胃を破り吐血し身まうたり然程に親肝入りその次の年の夏五月時疫を犯され病上絶ふ一旬あまり醫師も半分あきらめけれども堂と返まず如く劇をまして世上まうの其の病中に男人們の俺二親に勘當の賠詫と這身を召かされ親の経営や活業を嗣て主人まうくれども持崩せりとて辰の浮き心改められ僅に二稔ばかりの程に宅も庫も沽却し裏家住ひのそぶ中そ母親も亦ありけりその初七日に藻潮草掻集めも數まうの家材を送るく敗鐵経紀に售る錢に月来の房錢の債に屋主に推留られて勘定の合数字號の質牌に借屋の柱に産残り四十七文の假名川を立の退けとり鎌倉金澤いべ上大磯小田原貌姑峰の湯本這里半年那里に三月同氣同病相憐む友まうるべに生活もせず開鉢に浮世を宜ぶと五六稔に徳而今茲相損る底倉人に身を寓せて西月まうるの程に開鉢に利を失ひ債と賠に術尽ぬに窮心の復起りその進退を考へに折り相摸の眼代に藤白集人正安同主人に湯治の暇を賜りて底倉の浴室にまうり民の膏脂を絞りて富る屋せ酒宴遊興米邑にあれば田粥まうりいで那里に潜入り宝の山猟造化も宜かんと計校る准備とて夜に紛れて件の旅館に潜近つた垣を踰窓より入りて安同主の臥房に赴き却彼此と極撈るに窮倫に熟ざる悲しに思ひも度に喪ひて傍に臥る壁妾の足を蹈んに忽地覚て吐嗟と叫び声に驚き安同主倫兒入りと呼ばて岸破と起て引組む遮莫在下も小膂力あり相撲も聊嗜みに左右に組伏られど且く挑争に程に駭覚る近習の侍紙燭を乗て西五名に次の間より走せ来て主を援ひて在下を毅倒し壓累りて矢庭に縄をかけれる低て紫竹新墓に繋れて成敗二名側を去るに左右を程に天の明しに今に名斬られなんと思へば生る心地せず後悔の外なるに果しと庭に垂れて命俟間の厨下の豕亨にまうりいるべて世の憂戎今俺身ひとに摘て疼痛を知られける浩処に安同主人に引提く坐席の縁

頬ホ出でたる。雑兵們ハ是を見て在下を入牽立て主の身邊ホ推居ーを安同主熟
視て汝ハ原是何里のものぞ姓名宿所を具ホ稟せ快々まうせとホ問ひて在下
跪ひさシハ在下ハ目四郎と唱れる一所不住の博徒ホ頃曾ちホ遺ひ造化ヲ作れ
彼ホも此ホもヨマする債ホ苦しめられ。せん方の元ニ随ホ初て蜂起の夜拵ひ熟ホ枝を鎗
一文ハ[illegible]ホ忽地生拘られ後悔腑を噬むまぶホ俺ら俺身を恨るのみ。舊恩とていハ
さ只ハ[illegible]慈悲を願ーけれと卿言ハまく陳ぜーるが安同主領ニて。ホ優ー[illegible]ホ力
量武藝も習ひ[illegible]ホ本夜ハ昨夜とれく知れり領主の旅館ヘ憚りもなく潜び
入りー大胆不敵免ぜ[illegible]奴ぞねども胆[illegible]ホ見とろあり今ハ俺ホ役ふて一箇の功を立
んとるるべ[illegible]ホ助るのみ[illegible]ぞ必重く用ひべ。胸を定めて応をせよ。とのられて在下怡悦れ[illegible]
何ものホ[illegible]ども今斬らるべ信首を續ぐ御恩ホ預ふ非如水火の中
ホも辞ぜとるく命を的ホ勉て功を立ゆんや快く仰付らべ。と辞を放ち諾ーるが安

同主合女大ぞぐ。雑兵們ホ云云と下知ーて躯を在下ホ縄を解ー召登て飯を賜り
酒をも飲ーて更ホ閑室ホ召近つけて密ホ[illegible]ホ年来の怨敵あり此ハ是
藤澤ぞ。御士野上著演ヘ縁故ハ箇様々々と那人二度迄ハ[illegible]ホ辱を
攪りー綽の趣を送るべく説示ーて相模ハ今俺ホ配下ホ[illegible]ホ那奴ハ由緒ある舊家
ぞ自由ホ[illegible]ホ所ホ[illegible]ホ故ホ怨を隠ーて空ホ光陰を過ぜーホ圖らべも絆を用ひる汝を
ハつるを欲びるれ汝那里ホ計ーて[illegible]段を以著演ホ寝首を捕て俺ホ[illegible]ホ賞禄を
望ホ任ぜべ。ーとホ願心の家録ホ[illegible]ホ[illegible]と某ホ事を行ぼて做損ぜるとあり世ホ俺
出宗を免れ[illegible]ぞ。故ホ汝ハ委ぞ[illegible]ホ這[illegible]ホ[illegible]
ども那著演ハ武藝の達人ぞ[illegible]ホ役類ヨろ然ぞ在下單身ぞ本意を遂ん
と[illegible]ぞ[illegible]ホ優ーる短ぞ[illegible]ホ安同主勝を我ぞ
亦甚麽ぞ妙計を同れて在下此ホも擬議せ殿ハ知せ[illegible]ぞ著演ホ養[illegible]ホ

こゝく小六と呼做す少年は曩に殿の討捕ひし脇屋義隆の実子にして在下故郷に在りし時故あるを知れり。その顛末は箇様なり。今より九年日前假名川の親戚の宿所に英直がその妻母屋に送言を乞ふ。その趣は系圖の巻軸菊一文字の短刀の名まぐさ詳に其に生ずるこの地在下鎌倉に詐称して默止うるの義を以管領さに告訴あるべし。著演親子は捕縛せられ縛首せ刎られべし。這義なりと真実にして密談数刻に及びしが安同王愛くらべて執ぶと大かたなるに原来野上著演奴は年来新田の荷擔して上を蔑ろ野心の顕然たるを告訴あるべし。罪なれども疑ひ多し。雖然三の拒障あり。俺身今鎌倉に在ればこれを告訴あるべし。是一の拒障は前月湯治の願ありて五十日の暇を賜りしに三十日も迫るを鎌倉へ還らざるは是二の拒障なり。是三の拒障は持氏公の近臣京都将軍と御不和なり。綱は獨立の御宿意あるなり。新田楠の餘類なるとも先非改めて從はざるべし。思免のあ往くこれあり。徒れば今汝とを鎌倉遣しに。藤澤なる郷士野上著演は綱は脇屋義隆の子と合藏して養嗣ゆえに真に訴状を以て遲滞せん。是三の拒障とは彼らの障礙を釋んとなれば汝那宅は潛び入て小六が所持做す那巻軸と短刀を奪取て証据なるべし。訴状を捕らるべきの人は秘書宝刀を綱取るべし。心を尽くして入るべし。亦復宜く手段を易て著演が弓笛則ち或は刀子刀等は綱取らば繕成るべし。これ将他が所藏と目識なるべし。妙なるの東西既に入らば汝鎌倉のそなたに却訴状を奪んと野上著演は年来逆謀の企あり。然るに九年前より脇屋義隆の子と合藏して小六と名づけて養嗣なるを知らず。近曾那著演と象棋の席にて面會せしより交の浅からざるを恐て著演が綱を招きて譚ひ俺管領家と討滅し義隆のお子小六ぞ鎌倉の主なるを欲し和

殿ハ射藝銃鎗の達人でありしかれば窮竊ハ鎌倉ハ赴き管領家のあり外出の折を覗ひ狙撃して素ハ懐を遂さんとのゝ一人のみを以数百騎の将を撃つるハ矢砲飛劍ハ優のみ一這弓箭刀竿ハ俺家の重宝則和殿ハ持ちたるを以て管領家を撃捕めんと其ハ件の武器を贈りて吉とらんそのゝ座をとらせば撃果さんを面白の勝筆也ハ一味の如く心て那里を出るとそ依ハ注進の為参上せりと実事なるハ訴稟ハ窮竊取る弓箭ハ或ハ刀子刀竿ハ縛の證据とくとそ時を移さず著演ハ宿所へ討手を向られて那身ハ逃れ難宅の奴ハ一個も漏さず捕れて必獄舎ハ繋れんそ程ハ俺も亦鎌倉ハ還りまゐりて詮議の席ハ列るべし。その折著演冤枉なりとそのゝたゝりハ陳ずるとも俺亦智略を旋らし那奴ハ頭を喰せ忠ハ隨ハ稟做ゝ叛逆の罪ハ定ハ竟ハ三族を夷げられて宿怨其然果さんと愉快なるハ忠ハ勿論俺ハ忠許の功を上より賞銭を賜ハ俺も亦銭帛を畢て辛苦銭を取ん。駝馬ハ荷の捷大役ハ念を支を做損ハ多ハ上と其ハ亦金十両を賜ハ出ん。是ハ計議の雑費とて紙ハ拓を貶ハ在下欲ハ受戴ハ仰ハ必ず必ず做課せんハ吉左右を俟ん。ハと言兼ん旅舎ハ退ハ且身皮を剥ハ結ハ却平塚る相識許赴ハ逗留ハ夜も日も這頭を徘徊ハ大人の宿所を張ハ既ハ一旬許潜ハ入ん欲せ。かも内外の用心堅固ハ竟ハ便りを沒ハ一ハ他ハの折を覗ハ刀子ハ刀竿ハ窮竊ハ機を易ハ是より夜毎ハ暇あれば闇鈔を耽り件の金を繞ハ三夜ハ失ハ然とて已ハ。るれば昨ハ朝ハ大人の他ハ寄ハ殺ハ躍差て花水橋ハ倒れて俟ハ豫の計校病者とせ歯を噬締ハ抱せ時ハ及ハ銅竿を疑ハ用れるハ造化手通魔使ハの折ハ銅竿を倫窮ハ伝而癲癇ハ逼ハ身を投ん欲せ。ハ毋ハ実ハ夏ハ餓ハ長者の教訓金一両を賜ハ違ハ慈悲善根天ハ受

別れてつゝ尋思を曾を定め難てあれども母を又弟の只一つこの方の遺際を銅笄を
のを窃をるがを鎌倉へとあれて安同主のられーどく訴へと勿論れども野上の翁を伏
とも知らで憐愍深く這金を本銭のせとて養られ恩の叛の猪三太のられーどく
友人の報計を除くとのひりやせんをのいぎの鎌倉罪をせんとてあれども然いとて藤白殿
も一旦命を助けられ雑費のせよとて十両の金を賜りたりけれ今ちく変易をるあら
ぎいのるのせーと胸のをを當ぬるを段あり俺造化のちーと尋思をせーの又究竟のる段あり俺造化のちーと
時紅粉坂の安鏡屋の紅毫許屋を借る洞房銭ヲくあり這一両の金をそ
那里へ急て帰るといで必れ彼と論をそ古借を債られんをの析甚く罵狂る那里の奴
們已をとるを必俺身を困てあて鎌倉へ赴て憲断をとひまつべ恁く問注所の詮
議の及ひでつゞ所持をる一両の金の出処を問れん時件の金の藤澤の野上著演養
なる那著演い箇様々々とあの至て藤白殿のられーどくるべ立て誣て叛逆のよう成

稟さが言不用意の出るよ仮野上の翁の恩の恩も叛る藤白殿の頼れる密謀立地の
成就せん然とこれ安鏡屋の訴い外のるりを捏て牽れ俺ら細を安も釋るのをるーで
逆徒を告訴の抽賞の東西許ヲ賜るべ便是一事両全これの優る手段のあら
ど深念の腑を固めーち紅粉坂は赴て形のどの計ひの豈思ん今朝も亦花水
橋の頭の伏て大人の撞見てぬるひ恩義を受んとの素より大人の侠気の世の風声
を知るとへども飽まを仁義の富のひる至善の長者の御座せを這身の不肖とのひ犯
ぜ薄情や貧吏の相譚れて无実の罪の陥さんと仮倆所行を悔ける今俺身を
恨むも甲斐ず。切この大人の戯悔七左も右もるーでやと思ひのれ何容ると俱せられく
あへまおりくり親の不孝他の不実の罪を思ひ放蕩の頼三十餘年の非を知るも只
是大人の高義大徳人の及ぶ誠心の感服せーのとりて恁れ大人いとの為の善知識を
なのれども恩義の報ん術もるーー今面前の身を殺とのひるとの詭論るの知せまつん

允させぬとのこと果て遽しく身を起し柱に觸れて頭を砕いて死なんとせしが著演柔遠さを
呼禁めそやとや等目四郎短慮の功を誇ふとあり心を鎮めて坐に返れ性を忌り母そと制
されば目四郎僅に気づかへてさて死なんも死なれざるとの声口隠る感激の目を屡瞬く一滴
誠の神に露れて技難く平伏る英君演頻りに歎息して又目四郎を呼近つけ四下を
見かう声を潜めそやと目四郎に向ふ優くる懺悔の趣現蕙蘭を折るのごとの刃あづ
く芳しく又韭葱を採るのごとの臭しとのこけん古語ゆも似る善悪反覆
濁を去て清に従ふ汝が忠告に賞をべし那安同が邪智毒悪その奸計今ぞ怕ふ
足らねども敬嘆に値ふ小六がうへの他の脇屋少将のおん子なりしとぞ俺の知らざ
りし他の則新田の餘類館大六英直が獨子とぞ俺の親と敬り
子とぞりる俺まう知らぬ他が素性を安く汝の知られの是禍の源る所那楊震が四智の
誠壁に耳ある世なり遮莫汝が忠告に其の甲斐なはあれども言「しびロより出ていの駟も追

がるる小六が素生を安同に知られるの今ぞ復され難き縦汝が管領家へよ
しと訴まうさばも安同帰府せば告許に俺三族を滅さんと計ばるるうんそも亦時
の命なるが辞まれよりもうとるる小六を俱に罪なしとの年来盡せし志の空花とるを
いかでせん他の則英直が獨子なるが俺身と共に死なるも時運と諦めて思ひ絶ぬ堪もな
脇屋殿の妃子なりとぞ惜くぞよと惜くぞよと惜くぞよ俺も亦汝を用る所の死を惜ゆ
の所以の辞のいまだ起らぬ間に便宜に任し小六を賜へ伊勢の神戸へ落し遣はべし伊
勢の国司北畠左中将親能卿父祖の時南帝の外戚なれば人望重く南北両朝に
和睦の後足利家に後ぞ名を満泰と改めの然ければも南朝の聖恩に今更に忘
べ人まのあれば使れば小六が世を潜ぶ方便宜の所へ小六を既に其藝に長て思慮の勇敢
ありとのへども尚十七の少年に那身一箇を手放て落し遣るべ長途旅宿にて不便よ
あるべれ汝窮に縋ひ隨ひて那地に到て仕へるべ死まるに捷やう義士とぞ甚麽遺詞とな

ゑる欲と胸の秘事うち諦ていと丁寧に説示せば目四郎皆て教ひてそゝのいと易く御用に非如異国の畫処まぞも今郎のお伴とも。苦労を分ち切その報恩謝恵ひろ首途の日の定らべるゆゑ指揮を願ふのゝ。ゆくゆく著演領に。命ぜ汝い平塚る。宿に退出で便と等小六とのまぐ認らべと同を目四郎皆も不古ん目四被らべ那藤自の密議ふよりそきのふまぐも這里の内外を張清せるゑれば。ん客貌さ声音さへとく認りてゝ島夜ゆも徳ふいトとのふ著演又領に。懐ゆ鼻紙刺の異代袋をとち用に。有つふ金三西を取出ゝ目四郎ふ與へて又ふ告う汝い且這金とも。笠脚絆腰刀雨衣まぞも買整て旅装ゝ小六を俟れ時日いまぐト汐ぞゝ又後ふ知らべ。快々立れと急せば目四郎い件の金を戴に収め後日を契ゝ告別ゝ平塚ゆ旅舎を投く退りけり。

第十回

相模川ふ小六横死を示す　遊行寺ふ著演頓悟を葬る

館小六ゆ這朝例のごく疾起ゆ。奴婢之助ふ大学の句讀ゝ授果ゝ比養父著演が梅澤よりへとゆく深ゆ来ふければ遽ゝく出迎て恙ゝを祝ゝ路の疲労ゝ尚慰めゝ倶ふ早飯ゝ食けるふ著演い客ありとゝ。ゆくゆく箸ゝ図に。又玄関のゑふ出りふ六ゆ親て生れ平ゆあらゝ慌ゝを訝りゝ来ゆ客い誰ゆらんと。ゆのゝゝゆ問ゝ。ゆゝゝゆ俵書齋ふ退ゝふ猛可ふ胸のうち騒られて何とゆく欝結れ。気ゝ雲霧さんとゆひて。徐ふ庭ふ立出て。ひとり彼此とゝ豆ふ離金ふの縁頬の頭ふ開ゝ鬼花の竹離笆ふ真白ふゆまぞふ最盛りゆければ見く其処ふ鳴立む程ふ那密談の緒の趣目四郎ゆ懺悔の忠告及著演ゆ饒ゝ一言の首より尾まぞ。圖らぞふ感ゆ果て或い驚ゝ或い憂ゝて。竊ふ書齋へ退つ。獨熟思ふゆう那目四郎とゆうんい島許の癖者。窮奇情杭の取るゆゆ。大人の善ふ感悟ゝ鴆毒還て良薬ふゆゆゝ。ゆゝゝゆ至誠の致を所今ゆゆゝゆゝゆゝ大人の徳ゆ有ゆゆゝれ狀ゆゝゆゝの去歳の秋まぞ俺ゆゝ知ゆゝゆゝゆゝ俺身の素生ゝ目四郎ふ知ゆゝ

たれども世の浅さでありし九年の光陰を経て親の仇を安同の生られしは鬼神でも前知
者でも時節到来竟に脱れぬ枉屈神の祟を今ゆゑいかでせん遊莫俺身の故に大恩受
—養父母の罪免れんと知らぬ身に何処へか立退くべき然とて倶に手を束ねて討死の
為に捕れて親子齊一死んの益なし所詮支の破れ取先に那底倉なる安同が旅館へ獨潛
入て慶金に做きまとに鎌倉武士も京家に安同ありと聞ば殺す果しを
けれども禍頻に消滅して養家に恙なく居べし然でも那奴の実父の讐を折をゐば殺す果しを
先考亞将の霊をいかで慰めまいらんと思ひ決めしかども亦時節到来の本意を
遂ぐん嬉しやまうれしやもの仇を那安同を撃るべき所為多き人に知られまじとの科
養家に及ぶべし俺が所為なるを思べ世の人に知らせ給はんと腹に問ひ肚に
答て時移るまじ謀慮を凝らせ才子の憶断やう深くかと思ひ計るまじ夜
竊に起出て牆を踰藪を潜りて相摸川の邊に赴彼此と見且に頃は夏の肇に

月の中浣のあれば若葉に曇る遠山の迎梅雨に水倍して流れに特に速る人民這
方の岸邊に竹藪幾町扶疎を立て陸にも水にも分ぬ五六間伐開て野渡の舩
場に成ぬ這頭に總て人煙稀なる路津高師の孤屋あるのみ檐下に河原に
重三三十行可き葛石幾箇もあり舩俟人の立疲れに尻を搖さぬ為なるべし小六を
其頭を得と見て躰く宿所に赴く程に遊
行寺の鐘音つかるを聞き漏さじと慢れば短夜なれば尚四更なり小六を徒に枕に
就ぬ甲夜より准備なりけ袱包を又庭へ出て樹下なる石燈籠の内に隠し
燈籠の小障子を故のごとく建れば知るものなし看官這袱包の内中なる何
ものの東西ぞと尋るに菊一文字の短刀と那系圖の巻軸と金五十両にぞありける這
小六が出なり英直夫婦の正首に守りて俺身に携へ授け父の送金のそが尽て二百
両あるこれば今より後俺が盤纏に医ぬ底倉なる戦殁せし那楊州を

る
鶴に騎て十萬貫を腰にまとうとも亦何の益か
養父母に贈り給ぶの年来艱苦の雑費の十が三
金の盤纏に要るべと尋思して形のごと那二包の金を二箇に分ちて百五十両を字
紙に包み舊の如く衣箱の底に藏く送り措るべ問話休題却説小六をの詰
朝生平のあくび起ても出ぬ笑も知る人の名を声高に呼び立て或は罵
うち笑ひ或は歌ひうち歎く千態萬状限りもなく立てはうち又うち臥して連に狂
騒しに奴婢の駭き呆惑く主人夫婦に報じて著演晩稲も亦驚き共
侶に走り来つ叱りても諭しても小六をのごと鎮ぶべ親子の分別なくて著演晩
稲を疾視嗜りてひたすら罵り狂ふ也傷痛為体全く乱心とはいまだ晩稲を怕
て身邊へ寄らず著演とても也術なければ猛可に醫師を招きて容体を告て
療治を請ひに小六を醫師を寄せ着ぬ又甚しく罵りて和解て脈を診んと

すれどもの口に把られて矢庭に醫師を突倒して撞て剌立の頭を三四
撻ぶ醫師は吐嗟と叫び辛と逃退いて著演別室に伴ふ賠話く藥
剤を請れる醫師は百會に唾を塗りて衣領撥合て苦笑して醫意の病体を是
乱心に凝ひて倘狐の憑きたぶ樒をもて熏べ小らば狐妖顕るべ總て箇様の難
病に良醫とふとも即效を奏ずがたのあれど然て治せぬとのあるべ只看病を
専要なりの醫員は幼年よりの習讀書に氣を屈めて故のやうに痼
症の人年久く心を労すれば這病あり是を用ひて試べと密に醫按を演く湯
液五貼調合せて遞与て躯を強に薦ん
と欲すれば拂退け皆うち滅て醫療徒事にのみ著演深くうち歎て鎌倉
の名僧驗者に祈禱を請ひ加持を求て心を盡すもなれど小六を夜も日も罵
狂ひて病の僮僕们辛と捉禁め横うち破

せく壓鎮めも幾番といふことをしらず。その故に著演は日夜看病の人を増してその身も務を廢する迄に間もなく時々看とりけり。左右する程にはや五六日を經にければ小六が狂乱稍鎮りて飯を喫ふと數椀に及べり。著演晩稲はその為体に聊安堵のおもひを做して。病苦の可否を訊るに小六は絶て應をせず。只ぞ伶箸を投捨て仰反てまた臥し夜が高鼾して久しく覚ず。恁而這日も暮しかど小六はなほ熟睡して快き氣色なれば是則加持祈禱の法驗によるものなるべしとて二親の歓びいへばさらなり。看病の奴婢們相賀して懈るとなけれどもこの五六夜の程は睡ることを得ざりしに只今宵のみ静かなれば更闌く隨に皆ながらも各々睡眠を催して四睡の虎にあらねども或は猫児を膝に伸し或は背をうち合して寂然として目睡けり。小六はこれを見済して竊に起て縁頬なる戸を開き庭に出て。ぬき足で夜石燈籠の内に隱措たる衹包をとり出して腰に附て足ばやに後門に赴きて鎖を採断て戸を蹴開きて西を投てぞ走りける。その登時看病に侍りける奴婢們は小六が

後門を蹴開く音に驚覚て臥簞笥を見るに小六はあらず衣は脱捨てありけり。趕よ趕よと罵り騒ぐ諸声に著演も晩稲奴婢之助も起て來つよしを聞て看病の怠を責め咎むべき暇だにあらねば周章て著演急に推鎮めて益なき穿鑿時のみ移らん。俺が門前より東西の岐路特に三叉なる部を定めて趕留めよ。誰々は西の方又誰々は東の方。蕉火をもて走るに便あり。僉挑灯を携よとていそがし立る稜快なれば最も烈しき主命に誰か此も擬議をすべき兼りぬと応も果ずやとりどり挑燈を片手に引提々裳を引折り草鞋を穿も穿ずもあり。十名あまりの家僕們老僕小廝に至るまで數を盡して後门より走り出路を分ちて喘々趕ける。然程にその夜丈小六は故意と後门を蹴開きて西を投て走る程既にして一里あまりの相模川の頭に迨ふ頃は夜亥二十町ばかりもあるべからんと思ふに折から忽地後方に人音して趕來る両個の若黨字は六画七と喚做るが弁一声々海の立てそ來今郎にあいまで留りたまへと呼び呼び掛透もあらせ

狂人不狂不狂人
還狂惑

有像第十二

む趕近寄を小六を佶と見て原来追人へ迫りて俺が九才の時ゑ夢ゑ辨の趣
似て居る私此懲さぞい倒ゑ足ゑ貴縁ゑ有るんぞえ点へば霊妙時停在て田んと近
つく字六が腕を右ゑ抓んで引肩被ゑ打と投げけ。修煉の巻法ゑ魂滅
法ど苦と叫ひ一声ゑ怯まず進む画七を左ゑ受て足を飛と礙と躓る蹴られく
画七も云とだろゑ胸を反と倒れる小六をこれを見て河原を投て走りゆく影い
隈無夜中の月ゑ見て読め一文不通の字六を膝ゑ踏て立まくれど猶痛む
あゝ歌画の何曾々ゑ似る画七も頁山の腰を抜と野遍ゑ跋ゑ態も両樹の坐
行松跋ゑ見る今合郎ゑ嘶々と呼被ゑ声を嗄と捧れ跋る。然程ゑ館小六を又
只管ゑ走る程ゑ既ゑて相撲川の頭ゑ来よけれ。這路津場ゑ見機石の重
三三十斤もあるを軽げゑ抱て岸ゑ繋ぎ渡船ゑ乗と件の石を川へ
夾と投捨て又引々と河原ゑ竹藪へ潜と程ゑ所ゑ身を潜め趕ゑ人の

形迹を且く這里ゑ覗ひ。浩処ゑ字六画七へ後れて来ゑ僮僕ゑ連立く
趕蒐ゑ皆路津場ゑ停立て隈る。月影ゑ見一旦ゑ限る彼此ゑ霊妙時跳
ゑ却ゑ。俺ゑ投られる那里ゑ這里ゑ岐路ゑ。何処ゑ行ゑ
見よ渡船ゑ這方の岸ゑ繋れる儘ゑ流れ波濤ゑ踏て流ゑ渉る仙人ゑ
ゑ前面へ赴ゑ人ゑ不思議ゑ思ゑ。
ゑ。ゑ彼孤屋ゑ敲ゑ起ゑ。路津笥師ゑ答ゑ萬ゑ一ゑ知ゑ
ら。然ゑと躰ゑ食共侶ゑ件ゑ門遍ゑ立ゑ連ゑ門ゑ敲ゑ。
ゑ。俺ゑ狂人ゑ趕蒐ゑ。今這川ゑ西ゑ渡ゑ
ゑ。ゑ呼覚ゑ裏面ゑ一声ゑ応ゑ答ゑ頃ゑ起ゑ。ゑ
里ゑ路津ゑ成る翁ゑ喪人ゑ左見右ゑ。ゑ
犯ゑ何人ゑ前面ゑ。ゑ日暮ゑ。今ゑ。然ゑ。ゑ

より些一先つ立て俺門邊を慌しく人の走る足音あらるるぞと思ふ程に何ぞもろ〳〵
水音の火と呼ばれて爪後に異なるものも各々に提れまた狂人はあまた来て
身を投るものあり或は大変なるまた什麼何処より身を投て流れ
沈るものあり迷ふ者多く皆来て天よと罵る字六画七们と共に路津笛高師さへ立出て水
際に出て月光に乗じ挑燈を吹消て
足あり只これのみにあらず船より船底を濡せ水に乾き遠光景を衆評斉一
あり遠船より河中へ身を跳らせ遣られ時飛走水の如き庭草履も目覚め
是則那阿人の庭より這里まで穿れ来て脱捨られ疑ひ
つくるも多く奴惘然と卓河の水を眺て鳴立む程に著演に小六の心と限り
ありれば小廝に挑燈点さて晩稲と共に這路筋の長発畛を巡環の家
来り河原に評議を凝したる衆人を見て声高に字六画七们
小六がうの心に撰りて堪られぬ居て便りを俟んとて歩んとする歎息に吾
妹子も倶にとりて林にあるて歩しても人を遣されば月明に夜も子生の間を辿りて
つるぞと呼ば晩稲も目を拭ひてやよ字六と画七们よりの小六に遣ざる欲と問ふ夫婦共
倍に走て近着に衆人も皆応を為て左右に別れて立迎へるぞ中に字六画七们進
出腰を折めて家公晩に向て奥さまもとを遥々来れ苦労を令郎の
這川の水屑とならせぬと報ぬ夫婦の雫果て胸を潰す声あるべきを汝
知らず放て死ぬ詳に告よいかぞと辞せず問れる字六画七们頭を撫
叱らせぬ吸次の始末を知らせぬ故に俺們両名いかにせん衆に南郷の頭や令
郎を提携者ならず推留んとせるに夜分のこと撫机を引寄て右と左へ三間
まで行を拍て投ぬ此彼倶に腰を抜て起んとせに足立ぬその間に令郎が這
方を投て直走りに走りて見えざるの折から畑平畔藏們も後走に来れば報苦

痛く忍び難く共いは趨蒐なり。這河原まで来てさるふ寂寞として人影いとまれ因て這路津成る公羽と連りふ呼起して箇様々々と洛ひしを夜河渡さ表制度なれば立明面へ渡せ人いるれど今より此て先の程恁々のるあり けりと報られるふ胸ら騒ぎていと疑念の霧ざれば這公羽さへふ相伴ふて海河原を彼此と索ねまわせどもけるる果てに公羽のいつふ違ふを是幾せ船の内は今郎の脱捨なひ庭草履半隻あり又舷より船底まで濡れ底ハ是入水の時飛走水の撒ちまつんれらふよりそ今郎ハ既ふ水屑ちりのひ死とあり決めそのへと辞ひうく真実ちて報を受けば六日の昔浦十月の菊まるふ晩稲いと声立て泣くを禁る著演が泣ぬい泣くを弥増て千萬無量の心の哀を示る方もれ知ーを少ひ〳〵へて声高ふ證跡分明るとて汝ちが推量の違ふ泣ふ知れども然べとてもと空くてうち眺めるとあある縦小六を病病ようそ不覚ふ入水をうとも年来習るる泅水ま技あるめを萬ま一ッ急流と凌ぎて前面へ渡せ換ふ

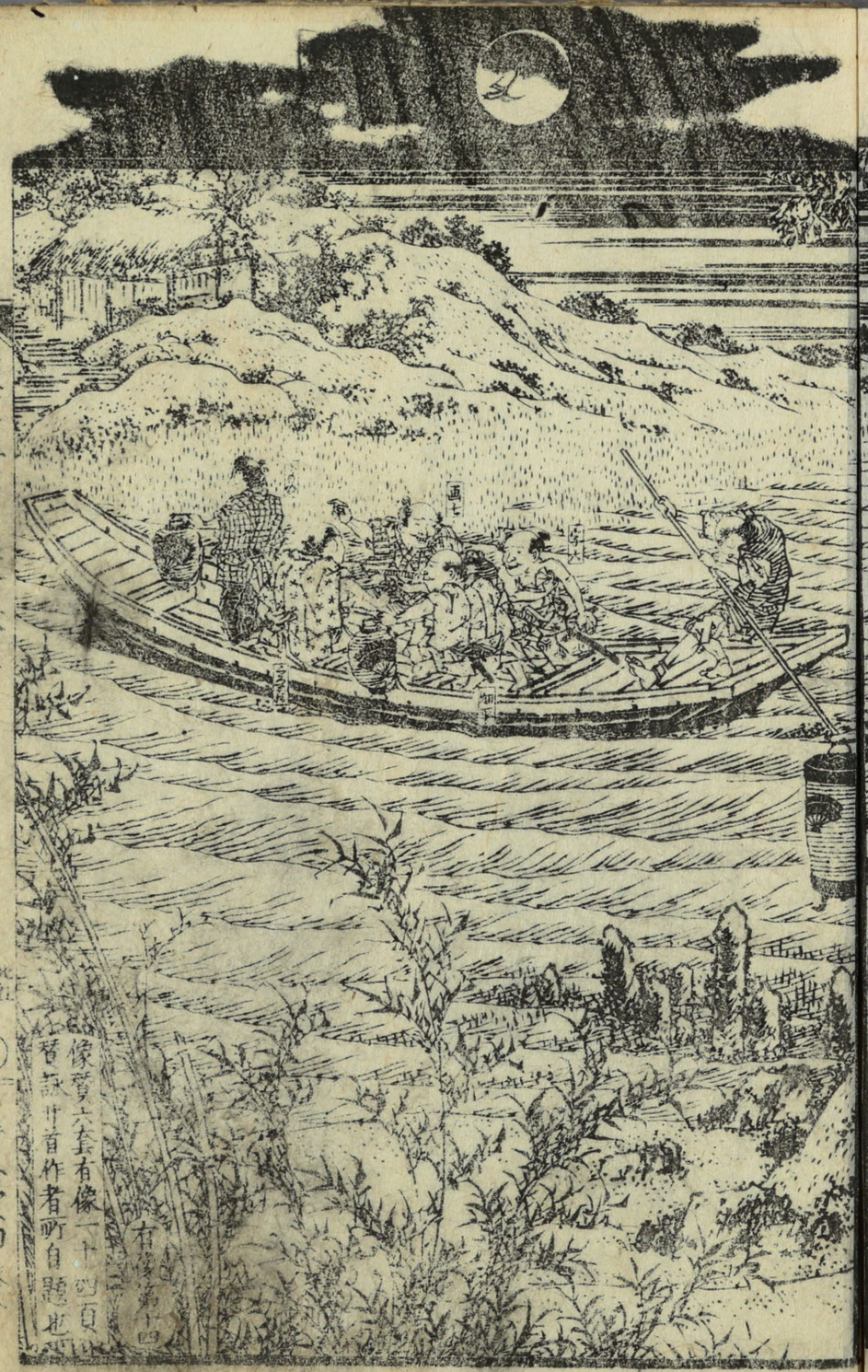
てる亡骸ふ涉猟らを空ふ已べ泣て這方の岸を竹藪のを見船りを西の岸へ渡しく索ぞ〳〵と敦圍と路津笘師ハ推禁めをる宣ることをく這早川ハ貌姑峯より這方ふ類ヨヌるる急流でふ。ふ比の霖雨ま水岌毎ふ十倍ち船尚自由ま遣がる然ばを〳〵ま中ま人ち佐々木梶原ちとも溝渉をるもあらぬ没るとを推流さまく瞬間ふ幾十里ら流されるひふ疑ひを。とふを著演ちるを余りとも後々まを遺恨ちるん為ふ是這僮僕ハ船ふ乗ち前面へ渡ー案内をを索られ来溝ーるん夾貸ハ此も歌ハぞ俺ハ野上史と名告るを少て路津笘師ハ。ふ又一説ま及ぶを原来慈悲のるるる藤浦の大人でをを〳〵ふ這河原ハ遠るる南御の地頭でをるふ夾貸とのるんや食快来をのひねとふ衆皆ちるて主人夫婦が相て来る小厮も俱ま散動々々と齊一船ふ乗ば路津笘師ハ纜を解ハ棹を操ちを辛くも前面へ渡ひる著演ハを目送を晩稲と共ふ身邉ま。葛石ふ尻を撒て那ハ還ら来まとて立ち去ーで在りける程ふ晩稲を今宵者

病の奴婢ども由断をのひ出さく復るを正木の葛根い絶て長死別れまるを欲と
人を恨その悔吝愛惜唧言ふ果しまるを著演禁め將へとぞ又愚痴の諍言知ら
ぬ小六を総角よりその心操浅ましく才も器量も千萬人ふ立捷りしかば文学武藝
両ながらその妙奥を極めふ学ひ付く狂乱の劇疾ふ犯されて逝て返る這河水ふ身を
論めい前世の約束事でありけんめ今を諦せ那英直い俺が年来の相識るも況
迄ふ義を結び俱ふ異姓の兄弟ふるふ夢ふぞも身まおぞえ死とるを英直が臨
終ふその妻母屋ふ箇様々々とのたまへい俺を頼ん為のことの故ふ英直が俺ふ與りし書簡ふ
一丁の字も寫されぞ咸素紙をもあるを事情を猜るふ英直年来俺が親愛の趣を
彼等て世ふ憑しく思へども素ふより俺と一面の交りなければ悠々とのひとりのるを故ふ又妻ふ
のを箇様々々とのたまへ誘へて妻と子を俺ふ寄せるふ空縅る素紙をもせいはるが必ずそを
意を猜しん辭いで需ふ応ぜぬ義気あるようと知れがたの故ふ俺も亦その假言を真とて

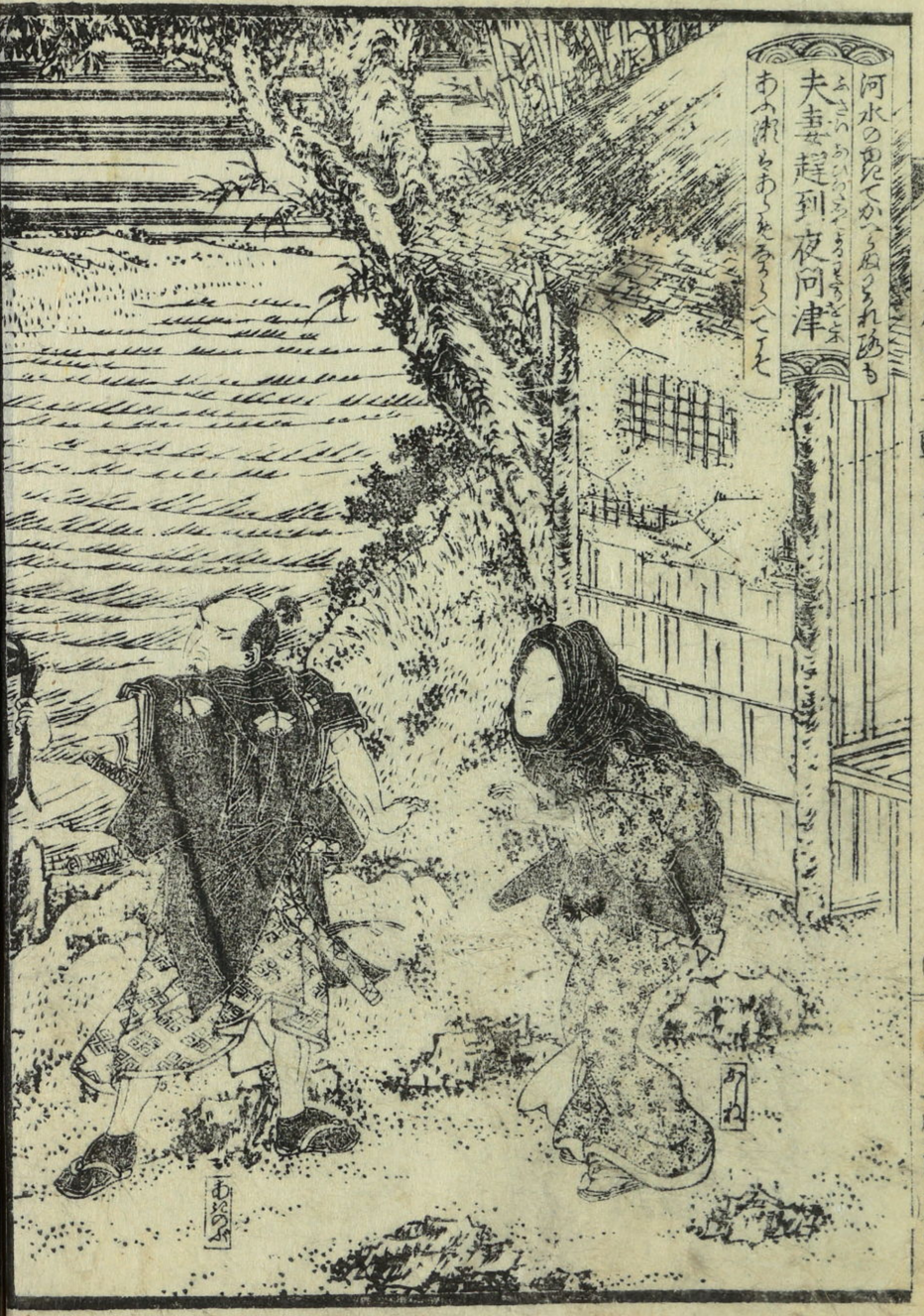
渾家ふぞも機密を知らぬ九ケ年心を書ふ意中の情義のけふ一夜ふ皆画餅
とるるを憾い渾家が獨悔やと歎く唧言ふ千萬倍の慷慨を限りもあるねど死生命
あり今ふ惜めどとも壁ん那英直い新田の餅類脇屋の家臣なるを俺初るるを
ふられぬ小六を英直夫婦の子なるを是則その亡君義隆朝臣の乳子なるの義ぞるを
日ま俺つを知らぬ日花水橋ふ到て来るを月四郎とふ破落戸が戯悔ふよ
ぞ不憶這実説を語るを那日四郎い九ケ年前假名川の客店ふて英直が病中ふ母屋ふ
送言せるを料らぬ窮闇を語るふ小六が素生を知るとのたまへふ当国の眼代家
藤白隼人正安同い箇様々々のるを年来俺と快らぬ心ふ刃を磨くるふ那日四
郎が怨々の古文ふ一時安同ふ件の機密を告ると安同これふ便りを得たいふ小六ふ俺も
亦逆謀ふと詐訴とその宿怨を復さんと謀ると既ふ意ふ然ぞ義ふ背ぞ滅ぶ
命を惜む妻ふ野心を諫ると言ふ小六を脇屋の公達

るゝ死と覚ていさゝか色にも出さず。英直母屋の孤忠節操感ずるあまりあるべし。俺身と倶に非命に殺さるゝ。年来の博愛氣節も只這一事に虚名となりて死しても冥土黄泉の英直夫婦は何ともいえん辛のいきを起らず先ず小六を他郷へ落し遣らんと思ひかゝる。告るふいまゝ暇もあらで入水の途ふたゝび来て送憾ちい言語も筆も及ばれ難き悲恨。愛哀苦労の心裏いかゝるゝん察しぬべとのみにても目と屢瞬く真実深意世ふ又類あり。情由を初て聞く晩稲いかゝけるゝとなるを慰めていとゞ哀れ。夜川の水と堰こゝ涙の流せる。身の憂ゆゝしや呉竹の萩数ふ久く躁ひる小六を思ひ難父母の密談密意を洩さゞ且驚く。心ひとふ思ふ。俺ゞ大人の侠気義勇即ち人の及ぶ所。今あてめ及ばゞ空滅ふる素紙を受てその意ふ悖るとなく素より知己のおもち者。俺身を養ひ育まれ恩を共ふ。災分つとのひけん往古の游侠義士ふも類稀とされらのようにいかゞ妙母さう。知らぬ只顧亡夫の義ひん弟ぞと思ひ〜ゞ況や俺いけのまぞも知るう

絶てゝ涙ふ又遺ゞ別ふ及び重ゞ恩と情の縁由を外なゞ聞く這身の薄命実の親ゆも異わゝ及九人年以来類育の親ふ一日も孝行らく仕へを汐せで詭りの横死を示ふ親と養父の仇を殺七那禍鬼をも襲んと思へゞ九させのとへ〜いえふいゞ苦ひ智ふのを思ふとを口説ふ。常合七伏拝めども影ふ隠ゞ最竹の敏系ゞ下の抱ゞ届ふ節も短夜のゝ暁ゞ不ゞ感涙の外なゞ落涙ふ字六西七ふ衆人と共侶ふ又船ふ乗りて這方の河原ふ漂ゞ参ふ却著演ふ報るゞ。仰付られるゞく前面へ渡七部を定め陸も水も渉猟ゞ。今郎の亡骸も生骸も乞ひ求ゞ路津筒師も著演晩稲ふ対ひて衢ゞ既ふ如ゞ無ふ水ふ高け れゞ石も流ゞ早河ふ身を投人の亡骸を索ゞ求ゞ且ゞ遂ゞ及ゞ。とられて本意なゞ野上夫婦ふ嘆息ゞ労ふ。ゞ孝ふ身を起せゞ明ゞ暮ふ横雲の間ふ名告る杜鵑冥土の鳥と変ふ。児を頼む死天の旅ふ残の月影ふ共ふ流ゞ河水ふ妻時



像贊六套有像一十四頁
上賛詠廿首作者所自題也



廻向の弥陀唱名親に離れ子に歎き在りと知らねば兵衛の世の憂きを見ひとりぬ長比べて形見の夢路を辿る心地に覚め迷ひの夢覚めぬ涙に濡れ雨袖の紫は尽後れる藤澤の宿所を投じ喪人を倶して徐ふ還りけり。然程に著演その次の日もつぶの日も人を相模川の頭へ遣して小六が亡骸を索ぬれども里人の亡骸を索得ずとの知らせ小六が渡船に脱捨てる草履を尽ふ柩を斂めて菩提建碑の示寂の後棺内半隻履の外なりしとの故事城ありもいで不審なるべし。然而著演小六が亡せ其夜の第五日の黄昏に件の空棺を擡出させて遊行寺へ送り遣せ程に藤澤南郷の里人なる五里六里四方なる遠近村落のあまたの僧侶を話績して吊送せしもなりし。然しも廣き遊行寺の本堂も客殿も所狭きまで聚合せし三千餘名と記けり。這日の施主の野上奴婢之助と五六個の所親なり。道師并ふ大衆へ布施なども英直安屋を安葬りし時なり一入心を用ひて法筵もべて丁寧に著演の那日なり則嫡子の忌服を受て喪ふ篭りを程ふひとり心ふ思ふ。小六を不慮ふ世を去りしれども安同いなほ飽ぎし鎌倉ふ還るの後たしなみ詮と許と俺を亡さんとて謀らるる遮莫小六が在ぞるりてひとく怕るふ足を絲ども倘捜宅をぞせれん折のある日四郎ふ問てうし。脇屋の家譜と菊一文字の短刀を他ふ入れ置く。綜ねづくしくなりぬべし。隠さんもと三尋思ひ入て妻ふも告げぬ只ひとり小六が子舎人を赴紀。彼此と撥拂るふ然るに東西絶てなりしかば疑評そ。鍵をたづる衣箱をひらき内中なる衣と中にたたふ三くらい母屋が像見の衣を那ふ誰へ這ふ某へと小六がるを写しる紙牌を附るあり。登時著演ふ言ふ。是ぞ小六が衣ふ小六が母の服裳の折紀念ふそ。奴婢ふ問ふ取せんと。隊より低擇做と措けんのを痛ふ。その服裳ふ人とうし夢の跡筆の蹟さ母も子も歎を送を紀念を今ふ空しくとまるふ隙もあるべ紀ふ忘れ難ふ愛惜の迷ふを胸ふ弱るを捜へ彼と取出べ

字紙に包み一金さ有り。金子一百五十両家尊家母刀貝と記し有り。訝りあぐね封皮と
折り。傷へ入るに数も違ひ。何麼のふしと這金を小六を藏置くべけんと疑ふのこゝろ有
らんを。ふ所にぐと思惟るに。ふる英直の遺金を艱苦の中に用ひも減さを以幼君孝
とて。その妻母屋に遁ち寄せ。狭母屋も年来秘措ひ。身後に小六が孝を。俺と晩稲
七母親の紀念とて贈んと思て記し置けん是をあり。彼を思へば忠臣義子の用意い
招別英直母屋を幼君の為にと思ふ。これを用ゐ小六を恩と義の為に亦這金を
みぐるに用ゐ前後両度の安葬と并に其の身を養育の恩に答る紀念金竟に
その身に要る紀東西とゝ。ゝを豫より覚期の所為にあらずとも蛇が知せ
写遣けん十三言の送墨い寸壁年も絶に十七歳の。ゝも夏毛を一期とゝる。
筆の命毛短さを。嗚乎義を哉小六が用心噫嘻忠を哉舘氏丈事を是主従
一對の賢才英智の幸を。ゝ天乎命乎造物者の惜む年を奪ひ狭仕ゝの死

喪の憾を。ゝとゝ。音に聞ゝ。夜鶴の子ゝを。親心堪ず歎ゝ。
思ひ入る眼包を拂ひて金を包み一枚の字紙を徐に引伸ゝ。
只を習の字に。ゝれも。ゝ流儀よ。ゝ。ゝ。ゝ助則と。
写ゝる。ゝ意中に。ゝ吟ゝ。ゝ則折句を。五七五七の句の上下に
脇屋義隆之子曽
ゝ言ゝ。ゝ言を措る。ゝ。ゝ至て著演い。ゝ方に駭歎ゝ。且
感ゝ。ゝ響ゝ。ゝを額に加へて。然ゝ小六を名将の子孫ゝを俺が類嗣に。
ゝ。ゝ編に差て。這筆遊に及ぶ。ゝん那昌四郎ゝ。ゝ疑ゝ。ゝ
這小六が詠草に名を助則と寫せ。ゝ迺曽祖義助卿の諱の一字を取る。ゝ
必額髪を剃て佳字を。ゝ彼と撰ゝ名を。ゝ花押を。ゝ定ゝ。ゝ初秋
ゝ母親の服中。ゝ黙止せ。ゝ他ゝ。ゝ撰ゝ。ゝ名。ゝ本意
悉に似ゝ。ゝ名。ゝ何に。ゝ紀念の金を。ゝ。ゝ益。ゝ嘆

息の声い洩さゑ襖戸の板廚を安そう又推開て衣も金さへ舊の隨ふ衣箱ふ斂をく
ゑ不隈もゑく又那家譜の巻軸と短刀を求めふ似る東西でふ多りくゑ。それを疑念
弥増し。那日四郎が怪々とひつゑい虚談紋然ゑ見たゑ吻術ふ狡猾ふ母屋ぎはに
ゑとゑ人ふをゑれんゑを怕れく遠ゑゑゑ山の石室ゑどふ秘匿ゑくゑふあゑぎる狡ゑふゑを
絆間ふ。ゑゑれば冬の山ふ杣木を摧ゑく花を求め夏の池ふ水を掬て永の厚を揣ふ
似ゑ。ゑゑも益ゑと咲ゑて却晩稲ふゑを箇様々々と是ゑの絆の趣を具ふ耳ゑ示せ。
ゑゑ晩稲ふ吻ゑゑゑ歎ゑく連りを袖を濡ゑる事情をゑゑ知ゑゑ奴婢之助ゑゑも
ゑゑ小六ゑゑを呼ゑけて樵ゑゑとして樂ゑゑ過ゑゑを泣ゑ泣もゑ童
蒙心もゑゑとゑ。然程ふ館小六助則ふ相模川原の竹藪蔭ふ書を繙き夜い
出ゑく。密ゑふ彼此人の風声を探吻ゑく上五六夕ふ及ぶ程ふ蓼者演い小六が亡骸を索
得ゑとひ做し。遊行ゑへ安藤ゑる。その絆の為体巷談街説異同ゑく既に正

ゑふ吻ゑゑ心安しとひゑ。竊ふ相模川ゑを渡し小田原の里ふ赴くゑゑ。衢ふ
宿所を狂ひ出ふ。その折の侭ふし。臥被ひとを着ゑを夜討の准備ゑとゑれば
朝市ゑけて骨董店ゑ故衣を買んとて彼此と渉猟る程ふ尚巳時可ゑ。口吻早威の
身甲と薄鎧の甲手脛脛と長二尺二寸ゑ大刀さへ一口ゑ。ゑれが詰取て板ゑゑふ
鉛ゑれども夏ゑ寒く。焼刃の匂微妙ふし。露を含ゑる朝の櫻の真盛ゑふ異ゑゑ。
鍛ゑが石ゑも辟ゑく。良刀ゑんとひゑ。衣共倶ふ件の武器を皆悉買とゑ人ゑ。
知ふ走ゑく心ゑゑふ身を固めふ打扮ゑて。菊一文字の短刀ふ件は大刀を
佩添て那巻軸ふ秘ふ包く腰ふ結着その瞟氏ゑゑ潛ゑふ底倉を投ゑゑ程ふ
樹下暗ふ禁路の脊の方ふ人ゑゑ。ゑゑ盆野上の今郎等せゑと呼ゑけゑ。此を是甚
麽ゑ人ゑ。其ゑを編を續ふ巻を易て第二集の簡端ふ解分ゑを聽ふ。

開巻驚奇俠客傳第一集巻之五終

○曲亭翁新著俠客傳第一集畫者筆工剞人目次

有像一十七頁　江戸　溪齋英泉

浮書筆畊　江戸　谷金川

繡像剞劂　江戸　朝倉伊八　原吉知

全巻刋字　京都　井上治兵衛

俠客傳第二集　曲亭翁著　重工右ニ同　全五巻

本集ハ舘小六助則ち復讐の支ヨリ起リ楠姑摩媛の列傳ヨリ至る
その間新奇絶妙の趣向取ヨりの第一集畫版の後年内打續て出板遅滞ス

近世説美少年録　曲亭翁著　第一輯　第二輯

同　第三輯　全五巻　共ニ十巻ハ前年既ニ刋布訖造番再刷
今年の新版更製本既ニ出来右俠客傳第一集と同時ハ賣出し候

和漢
西洋　書籍賣捌處

大阪心齋橋博勞町角
群玉堂河内屋　岡田茂兵衛

東京本所
農具考之解
竹町
一冊
[illegible]屋